

年史編纂室所蔵写真に見る

関西大学第一高等学校校舎の移り変わり

橋 寺 知 子

はじめに

阪急千里線で淡路方面から通学する時、関大前駅到着直前に車窓に映るのが関西大学第一高等学校・第一中学校のグラウンドと校舎である。第一高等学校校舎2号館の建て替えが進められ、いよいよ2026年3月竣工予定で、車窓からの風景は大きく変化する。本稿では、第一高等学校校舎を中心に、年史編纂室が所蔵する写真資料から景観の移り変わりを整理する。

一高・一中の千里山移転と一高校舎の建設

1913年に設立された関西甲種商業学校を母体に、戦後の教育制度の改革にに応じて、1947年4月に第一中学校が、1948年に第一高等学校が開校された（以下、それぞれ一中、一高と記す）。両校は天六学舎を使用していたが、よりよい環境を得るため千里山への移転が検討され、1953年1月の理事会で千里山移転が決議され、千里山キャンパス南部の関西大学外苑に校舎が計画された。写真1は一高

校舎建設前に撮影されたものである。グラウンドに面した階段状の観覧席と藤棚が写っているが、これらは千里山花壇時代の大運動場とその観覧席が残っているものである。

観客席上部（東側）に、まず一高校舎が建設され、1953年11月に一高は天六学舎から千里山の新校舎に移転した。設計は1950年頃から大学キャンパスの設計に携わっていた村野藤吾で、一高・一中エリアでも、1980年竣工の新一高校舎まで主要な建物に関与した。本稿で述べる建物はほとんど村野藤吾の設計である。



写真1 一高グラウンド観覧席と藤棚（1953年以前）

一高校舎（建替前の一高校舎2号館）は、写真2のように3階建の校舎で、1、2階は鉄筋コンクリート造、3階は木造という混構造で、延面積約2600平方メートルの規模であった。旧千里山花壇は起伏ある地形を活かした遊園であった。建設地も傾斜しており、最下層の1階は南端の出入口と2教室の部分のみである。写真2でも地盤面が北方（左方向）に上がっており、北面では2階建の校舎のように見える。千里山へ移転することを優先したのか、この校舎は教室を主としたもので、講堂等の施設は含まれていない。北面の正面玄関（写真3）は、目立つ装飾や庇はなく、扉が少し奥に設けられた控えめな印象だが、エッジの効いた枠取りがなされ、村野藤吾らしい意匠が感じられる。

2階までは鉄筋コンクリート造で、図面では外壁の仕上げは「コンクリート打ち放しに色モルタル吹き付け」とあり、写真4では外壁表面に型枠



写真2 一高校舎（1953年）



写真3 一高校舎北面玄関

丘陵地に建つため、北面では2階建に見える。シンプルだがエッジの効いたシンプルな意匠である。



写真4 一高校舎西面 北方向を望む

右手前は校舎南端の出入口。壁面は型枠の木目が浮き出ている。窓のプロポーションは古典的だが、素材や構成はモダンだ。

の木目が表れている。3階は木造で、窓は水平に連続する。屋根は、図面では「フランス瓦葺き」とあるが、瓦の正確な形状はわからない。竣工当時の写真は白黒写真で、正確な色はわからないが、フランス瓦やスパニッシュ瓦は赤褐色であることが多い。白色系の質感のある壁面に赤みのある瓦を葺いた勾配屋根を戴き、縦長の窓が整然と並ぶ校舎が出現した。

旧景風館の建設

1955年3月、一高校舎の北側に待望の講堂兼体育館が竣工した。のちに景風館と呼ばれた亀甲型の建物で、村野藤吾の設計である。鉄骨造平屋建て約530平方メートルの規模を誇った。扁平な六角形の建物で、勾配屋根にドーマー窓が付された特色ある建物であった(写真5)。傾斜地に立地するため、東面は接地しているが、南側バルコニーはコンクリート打ち放しの柱で支えられている(写真6)。内部は約1000人が収容できる広さを有し、室内には勾配屋根を支える柱梁の形状がそのまま表れていた(写真7)。



写真5 講堂兼体育館(景風館)(1955年)

亀甲型の平面にドーマー窓付きの勾配屋根がかかる。丘上に建ち、高層の新一高校舎が建つまでは目印になる建物だったと思える。

この建物は、のちに体育館が新たに建設されると用途変更され、内部は何度も改修されたが、外観は保たれ、敷地内で特色ある景観に寄与していた。跡地に2023年に新築された一中校舎は、名前を継承し、現在、景風館と呼ばれている。

一中校舎（扇形校舎）の建設

1957年5月に、いよいよ一中校舎の新築工事が始まり、同年11月に完成した（一中校舎1号館、写真8、9）。中学の校舎は扇形の平面で、教室南面にはバルコニーが設けられていた。この時期は全国で円形校舎が建設されたが、旧千里山花壇の敷地条件に合わせた形状選



写真6 講堂兼体育館(景風館) 南面バルコニーを望む
バルコニーを支える柱や階段はコンクリート打ち放し。上部構造は鉄骨造で、先細りの柱は構造的な形態がそのまま表れたもの。



写真7 講堂兼体育館(景風館) 内部
天井はなく、屋根を支える鉄骨造のトラス構造がそのまま表れている。1957年11月に行われた、扇形校舎落成式の様子。



写真9 一中校舎(扇形校舎) 廊下
廊下は教室に沿って円弧を描く。



写真8 一中校舎(扇形校舎) (1957年)
南側から見ると、当時全国で建てられた円形校舎のように見える。南面にはバルコニーが設けられている。

択と考えられる。

一中校舎の新築と同時に、一高校舎の増築も行われた。北方の一中校舎の方に向かって、既存の一高校舎を敷地の勾配に合わせるように折りながら増築し、渡り廊下で一中校舎へ接続した(写真11)。増築部



写真10 外苑北部の高台から一高・一中エリアを望む

一中校舎が竣工した頃の撮影と考えられる。右奥から一高校舎、景風館、一中校舎が土地の起伏に応じて建っている。手前の舞台は千里山花壇時代の音楽堂で、この場所には後に大学の屋外プールが建設され、現在は100周年記念会館が建つ。

分は2階建てで、1階に普通教室、2階に図書室を配している。2階建てだが、1階は西側から見ればドライエリアを設けた半地下で、地形への対応を工夫していることが伺える。



写真11 一高校舎増築部分(1957年)

一高校舎3階部分に連結された2階部分は、西面の空地からは平屋建てのように見える。ドライエリアを設けた1階には普通教室が配され、地形になじませた施設配置である。

理科教室棟の建設

高校と中学がやっと一つの校地にまとまり、1960年代にはさらに施設の充実が図られた。1961年には新しい体育館兼講堂の新築工事が一中校舎西側でスタートし、11月に竣工した。旧講堂兼体育館（景風館）は改修され、図書館となった。1963年12月には、正門近くに600人収容の大食堂が完成し、1966年にはその2階に増築がなされ、高中集云室が落成した。この部分は今も親和館として現存する。

1965年には、一高校舎の南西部で理科特別教室棟の新築工事が始まり、翌1966年1月に竣工した。これも村野藤吾の手による鉄筋コンクリート造4階建てで延面積約1000平方メートルの規模であった（写真12）。理科特別教室棟（建替前の一高校舎3号館）は、2階に出入口が設けられ、一高校舎の1階



写真12 （右から）大食堂（1963年）、理科特別教室棟（1966年）、一高校舎（1953年）

食堂は1966年に2階の増築が完成したので、その頃の撮影と考えられる。一高校舎の南端には1972年頃1教室分増築されているが、この段階ではまだ一高校舎と理科特別教室棟の間から背後の風景が見える。



写真13 理科特別教室棟（1966年）西面
一高校舎と調子を合わせた外観で、古典的な雰囲気が感じられる。同形の窓が並んでいるが、1階と中間階、最上階でデザインを変えている。

と渡り廊下で接続された。化学、生物、物理、地学教室が1層ずつ、準備室等を付属して配置されていた。鉄筋コンクリート造なので、傾斜屋根にする必要はないが、屋上のパラペット上部に傾斜した屋根状に見える手すりを回し、一高校舎と合わせた立面構成をとる。縦長の窓が規則正しく並ぶが、1層目は壁面を少し奥へ控えて柱を表し、また最上階4階の窓の周囲には枠を付し、単調にならない壁面デザインとしている（写真13）。

新一高校舎の建設

必要な施設を継続的に整備してきた一高・一中エリアだが、1970年代半ばには最初の一高校舎建設から20年以上経ち、老朽化が顕在化していた。1979年、新一高校舎の建設が開始された。これまでの校舎群の規模とは異なる、大規模な鉄筋



写真14 新一高校舎建設地と景風館

景風館竣工から15年ほど経過し、周囲の樹木が成長していたと思えるが、新校舎建設のため木々が伐採され、再び赤い瓦屋根が目立つ。敷地の高低差がよく表れた一枚。



写真15 新一高校舎（第1期竣工部分）から東を望む
2期工事の鉄骨の組み立てが進むと同時に、旧校舎北側部分が解体されている。



写真16 旧一高校舎 解体部分

残す部分の切り口があらわになっている。2階までは鉄筋コンクリート造、3階の窓台から上部は木造であることが明らかである。

コンクリート造および鉄骨鉄筋コンクリート造5階建の建物で、京都工芸繊維大学に残された村野藤吾の設計資料によると、グラウンドや緑、正門からのアプローチはできるだけ変えず、南面する教室をできるだけ確保し、既存校舎を使いながらの工事を条件として、複数案を作成し検討したことが伺える。検討の結果、グラウンド北面に2棟の矩形の校舎を平行にずらして配置し、大きなポリウムに見えない案に決定した。

写真14は新一高校舎建設直前の写真で、丘上に景風館が、そしてその手前の丘陵は、建設準備のため樹木が伐採された様子が写る。新校舎の建設に伴い、旧一高校舎の北面部分と1957年の増築部分は解体された。写真15は新一高校舎の1期工事が竣工し、2期工事に取りかかり、旧一高校舎の北部を解体した頃の様子を捉えたものだ。木造の最上階壁と小屋組が見えている。この頃から記録写真はカラーとなり、瓦屋根の色味がある程度知ることができる（写真16）。

1980年に竣工した新一高校舎は、シンプルな矩形の煉瓦タイル張りの建物で、南面にバルコニーを設け、白色のプレキャストコンクリートの手すりアクセントになっている（写真17）。旧校舎から正面玄関は新校舎に移ったが、変わらず校舎北面に設けられ、生徒の通学動線はあまり変わっていない。玄関には金属製の庇がつく。色はタイルと類似しているが、柱の形状や庇端部の柔らかなカーブ細部など、意匠上のポイントとなっている（写真18）。また北西部の階段室は扁平な八角形で、建物本体とは分離され、ガラス張りの渡り廊下で接続され、西面の印象に変化を与えている（写真19）。

おわりに

一高・一中校舎は、両校の生徒や卒業生の記憶にあるだけでなく、線路を挟んで西側にお住まいの方々にとっては、日常の風景を構成するものである。うし、車窓から毎日見ている人も多い。いちばん身近な「関西大学の顔」なの



写真17 新一高校舎（1980年）

新校舎はかなりの規模の建物だが、2棟に分け、地形に合わせてずらして配置し、線路側からの景観に大きな違和感を与えない工夫が見られる。この校舎が千里山キャンパスでの村野藤吾が設計した最後の建物である。



写真19 新一高校舎 北西の階段室
扁平な八角形の階段室が塔のようで、通学路の曲がり角のアクセントになっている。階段室と矩形的建物の間はガラス張りになっている。



写真18 新一高校舎 正面玄関庇

バタフライ型の庇屋根で、庇端のカーブや柱のデザインなど、細かな部分に村野藤吾らしいデザインが見られる。

かもしれない。一高・一中が千里山に根づいて以来、学び舎として親しまれた景風館、一高校舎2号館・3号館、一中校舎1号館は2022年から順次建て替えられ、2026年度中に完成する。本稿では、見慣れていた一高・一中の校舎を年史編纂室所蔵写真から振りかえった。1980年竣工の新一高校舎（一高校舎1号館）は、今春以降、内部を大幅に改修し、新築校舎とともに使われ続ける。キャンパスの景観は時間とともに変化していく。

参考文献

関西大学百年史編纂委員会編…『関西大学百年史 通史編 下巻』関西大学、平成4年

関西大学年史編纂委員会編…『学の実化 大学昇格・千里山学舎開設100年記念誌』関西大学、2022年

橋寺知子…「千里山花壇の設計図について」『関西大学年史紀要』第25号（2018）49頁－54頁

（はしてら・ともこ 関西大学環境都市工学部）

